

第三回懸賞小説作品発表

入選

雪

前編

田中光二
(たなか 踏基)

やはり思っていたとおり雪が降り出した。傘を持ってきてよかったと思つた。見上げると、無数の夜空の断片が落ちてきた。それが振り仰いだ眼の上で融けると、視界の上に丸く膨らみ、水銀灯の光の中にはと思わせるほどの幻想を与えていた。立ち止まって傘をさした。

雪は、海からの風に吹かれて容赦なく傘の内側に入り込み、外套のボタンの前を逡巡するように舞うと、布のけば立ちの上につんとすまして止まった。

角巻きの女が二人、話しながら歩いていった。角巻きの女は二人とも荷物を背負つた老女だった。くすんだ朱色の角巻きだった。やがてこの姿をした人間はいなくなるだろうけど。

若い女達は、素晴らしいオーバーを着てその中で歩いていった。ガムを噛み噛み足早に歩いていった。若い女は顔を覗き込まれま

いとして、傘をぐつと下げて歩いていった。

歩道の上の音のしない靴音が、女の、男の、老人の、子供の・・・身体を運んで行った。そしてどの身体も、街角で一度自分の存在を明確に意識させるように気取って立止まってから、白く降りしきっている雪の中へ消えて行った。消えながら次の瞬間はもう、深く静かに息づいて白い闇の中にじつとうずくまっていた。あたかも舞台の袖で自分の出番を待っている役者のように。

水銀灯の光に輪に浮き出している雪はぱりぱりと音をたてて降っていた。

美しいのが、これが夜から降ってくる空の断片だとは、女さ、醜いのは女でないさ、男特有の、出している。残酷な考え方を若い女は充分知らされていたからそう。星も墮ちたがっていたのに・・・

光の来ない所で降る雪は白くない。黒い点々になって見える。雪が夜を支え、夜ははじめから星を支えていた。雪だけが墮ちる。星も墮ちたがっていたのに・・・

今あらためて外套の襟を立てた。雪が降っても温度は余り低くならない。そう、これ

去年の十月、京都大学の吉田寮に友達を訪ね、そこに泊めてもらつたことを思い出しています。その友達の案内で、京都物をたたくも、入選！それはうれいことです。ことにちがいないです。ですが、こういふ事実に対して、きどりの方が先にきてしま

い、率直に喜びを表現出来ないのが私の性癖なのです。

から先、頭の種族にならなく、手の種族になることを誇りに思っています。数字や、メーターや、化学実験の、首を振り振り歩いているのは内心の何か素の臭いばかり関心

い、京都はよい時期ですか？ 想い出しています。苔寺のびつりりした緑に、竹林の間からさしこむ光の細かい単振動を、広隆寺の弥勒菩薩のすんなりとした、その指先の線の流れを。

（本名 田中光二 現在 新潟大学工学部在学中）

入選その時 たなか踏基

ヨーロツパか何処かの外人の動作のようできざつぱく見えるだろう。別に、ジャン・ポール・ベルモンドになる気はないのだが・・・あのフランスの俳優は、どうして外套の襟を立てたがるのだろうか、くわえた煙草を唇で上下に揺するようにして、手は外套のポケットにつつこんで女を見て歩いてい

る。だが、ベルモンドの真似をしようにも、両手はあいにくと、カバンと傘でふさがっている。外套のポケットに手を突っ込めやしないじゃないか。

女が視線を外すことなく、何処までも追い駆けて来たって、知ったことじゃない。そんなことは徒労だと思ひ知らせてやれ。前方から来るブルーのオーバーの女が、歩きながら見詰めて来る。馬鹿な女だ。そしてもの言いたげな口元はどうだ。

女は横を通り過ぎた。狭い雪道を通り過ぎながら、肘を軽くあててきた。一瞬、神経が張り詰める快樂を樂しめた。だが、数歩行かぬ内に、雪の中に捨てた。

傘やカバンを持っていなければ、ベルモンドになつて一瞬の快樂に未練がましく執着したかもしれない。握った快樂を、眼前に突き出して両手の指の一つ一つでねぶるように捏ね回し、いじわるくパット突き放して平然としているかもしれない。

《すみません。貴女の傘に入れて下さい》

女持ちの傘は小さく、差し出されるの天井に頭がつかえる。そして半分肩は濡れてしまう。でもかまわない。女の肩だつて半分濡れるのだ。もう半分の肩が濡れただけでももうけものだ。痛手は6分4分だ。いずれにせよ片方の肩は両方とも濡れるのだから。



でも・・・肉体や魂を苛立たしく消耗させるよりはよいことなかもされない。でもそれは一方的じゃないか。内部から強靱に沸き立つてくるものが、血管をかきわけながら逆流してひしめく。

潔癖な意思に呼びかければ呼びかけるほど、固定観念のように物狂わしくとりついてくる妄想？神聖な衝動のまちがいではないのか。淫らな気ちがいじみた幻想に抵抗し排斥するよりは、思い切つて想像してみろ！

《呪縛の輪がバネ仕掛けで、跳ね上がった解けた。何か解かれたのだ。音はせず、ひっそりと雪が包む。凍てついた夜気の中で心の障壁を除こう。凝結し麻痺しきつた理性の止金を外そう。新しい血液がゆっく

りと流れて雪を汚していく。その上を、またひとしきり感情の波が白く塗り返していく。白い顔に、蒸気した興奮の血の色をみせる。晒された肉体の白さの上に浮いて出る血の赤みが何と透き通つて美しいことか。言語はもはや存在しない。言葉は心でないからだ。恐怖は消える。柔らかな乳房の上にそつと置いた手に、さながらは春のような穏やかさで満ちてくるものを感ずるのに、心の内に、黄昏の夕霜の中に帰って行かなければならない、一抹の冷やかさを感ずる。左手の移り香が、かすかに匂う。やがて左手の掌の甘いむつとしたキヤマンベールを雪が洗い清めて行く・・・》

x x x

君は、休暇が近づくと、家に帰ろうか、帰るまいか何時も迷つた。迷うけれど、何時も帰つた。それも大方の学生が帰省して

行つた後でひよっこりと歸つた。「歸ろう！」
 パンツやシャツ、靴下の酸っぱい匂いを
 一杯トランクに積み、鉄道のチッキで家
 送つた。君より先に着いたトランクを開
 た母はびっくりし、後から着いた君は怒
 られた。怒られても君は平気な顔をして
 いた。君には姉と母、そして父がいた。それが君
 の家族だった。

母は、君を愛していた。君も母を愛して
 いると思つていた。両方で愛していながら
 二人は、互いに互いを苦しめるような愛し
 方をした。母は、せいぜいよく愛して君を
 十五歳の少年のようにしか愛せなかつた。
 ところが君はそれが心外だった。母は、小
 さい時から病身だった君を殆ど両手で抱き
 すくめるようにして育ててきた。事実、小
 さい時の君は、初めて見る外敵の前では全
 く無力で、眼をつむつて一目散に母の懐に
 逃げ歸つた。そして母の懐の中で、乳房を
 まさぐりながら、敵に向かつてあかんべ
 をしていた。子宮で女の快感を感じた母は、
 眼を閉じて君の頭を撫でてくれた。やがて
 獸的な叫び声を内に聞いた君が立ち上り、
 戸を開けて歩き出した時、母は君の成長だ
 と思つて両手を打つて喜んだ。喜んだだけ
 ど、直ぐにそれが自分を離れて行くことだ
 と気づいて悲しんだ。君は母を悲しませま
 いとして、いつまでも子供ふりをしよう
 と思つた。だが、君のふとした動作にも、

母は男とりわけ夫に似た男を感じて狼狽し
 た。君は子供のふりが出来ない自分を感じ
 た。君はしゃにむに歩き出した。母は君の
 背後から腕を延ばして歩いていく君を優し
 く抱こうとした。君は、そつけなくその手
 を振り払つた。母は落胆して、手を垂れた
 ままそこに佇んだ。二、三歩行つたところ
 で振り返つた君は、母のその姿をみてひど
 く自分を責めた。母に駆け寄つて、手を取つ

た。母は君にすねた。そして率直に自分の
 喜びを表現しなかつた。君はまた歩き出し
 た。母は悲しかったが黙認してやるうとし
 た。君はその母を見ると、また駆け戻つて
 きて、母を抱いた。抱きながら、何度も繰
 り返して今自分は母を愛しているのだと言
 い聞かせた。そして直ぐ歩き出すであろう
 自分を感じながら、自分にもそういいきか
 せた。君は母をそんな風に愛していた。そ
 の因子は、乳の出ない母の乳房に怒つて歯
 で噛み付いた時から、芽生えていたのだ。
 母はその行為を、夫のそれと同じように、
 君の母に対する愛の強まりと受け取つてい
 ただらう。赤児の君の力では、乳首を食い
 千切られるのではないかという恐れは感じ
 なかつたかもしれない。だが君にとつて、
 それは母に対する、いや女に対する挑戦を
 込めた宣言のようなものだったのだ。そし
 て母からの独立を予告するために、その膝
 の上で両足を踏ん張つて立ち上がるうとし

たのだ。君は今、外にパートで働きに出て
 いる母を愛していると心に念じているだろ
 うけれども……

× × ×

千恵子は、此々此々というように手を振
 りながら近づいてきた。君は急にとつてつ
 けたような微笑を浮かべた。

「待った？」

「そう、三十分くらいかしら。」

「……」

「あんたつて、何時も……平気で女を
 待たせるのね。」

千恵子は君の方を見ずにいった。

「わるかつた。」

「わるいわよ！」

「駅まで歩いて来たんだ。」

「そう。」

外は依然として雪で、先程より激しくなつ
 ていた。駅に駆け込んでくる人は、皆犬の
 ように身体を揺すつて雪を落とした。

君は窺つように千恵子の横顔を見た。

「仕事は？」

「今日は休みにしてもらつたの、マスター
 にいつてきたわ。」

千恵子はどこかはしゃいで見えた。

《仕事が終わつてからだった充分汽車に
 間に合つじゃないか》

「もう、発車まで五分しかないわ。」

千恵子は腕時計を見た。君も見てうなずいた。千恵子は先に改札口に向かった。千恵子が切符を二枚出した。千恵子の黒い手袋が二枚の切符を駅員から受け取るのを君は見ている。夜汽車はずいぶん空いていた。

窓ガラスは、スチームの熱で汗をかいていた。千恵子は着ていた黒緑色のオーバーを脱いだ。下に緑色のセーターを着て、首から黒い漆塗りのペンダントを掛けていた。厚手のタイトスカートで色も黒だった。君も傘とカバンを網棚に上げて、外套を脱いで掛けた。千恵子は雪国特有の白い肌と、剃刀をあてたことのない太目の眉、耳の下や鼻の下の産毛、ルージユも殆ど無造作に朱を引いていた。千恵子は、君のまえではことさら気取りを見せず、物腰も粗野で女の気配りさえもしなかった。千恵子は君より九歳年上だった。

君は千恵子と向かい合つて座った。座ると二人の膝が互いに触れた。千恵子は、無意識に手で自分の膝を隠そうとスカートの裾を引っ張った。《隠すくらいならタイトスカートなんて履いてこなけりゃいいんだ》千恵子はつんと澄ましていた。憎らしいほど澄ましていた。千恵子は君を見ていなかった。また千恵子のペースで始まるのだなと思つた。今日の千恵子はすねているみたいだった。

ガラスの表面を耐えられない水滴がス

と糸を引くように流れた。流れた痕に千恵子の顔が映っていた。その顔がふいに君の方に向き直つた。

「汽車、どっちへ行くと思つ？」
「こつちだろつ。」
君は方向を指差した。

「あら！違つわ。その反対よ。」
「そうじゃないさ。」
「あら、どうして、どうして。」

「賭けようか？ コーヒー一杯！」
「いいわよ。」

《結果の分かつているギャンブルか・・・》
「なにかいった？」

「ギャンブル。」
「ギャンブルって？」

「賭けさ。」
「あら、そう。」

君は視線を落としした。その先に剥き出しの千恵子の白い膝があつた。きちんと揃えた二本の足が心なしに沈んで見えた。突然、汽車はガクンと引きずるように動いた。千恵子は、突拍子もない声で叫んだ。口に手を当てると自分の上げた声に気兼ねして首をすくめながら回りを見た。

「でも、どうして どうして！ 変だわ。此処は私の町よ。私の町の駅で方向を間違つうなんて・・・ あんたよそ者よ。よそ者のあんたがあたるなんて、ねえ、どうして、どうしてあんたがあたるの？」

君は笑つた。この汽車はぐるーつと廻つてゐるんだと説明した。ぐるーつと廻つて反対方向に出発するローカル線と平行になるんだと説明した。千恵子は納得しなかつた。

「あんた、ずるい！」

千恵子が、こうして自分の感情を剥き出しにする時、年上なのに愛らしい年下の恋人のように思えた。何時もは、君を余裕を持って先導してくれる九歳年長の女だったけれど・・・君は両方の千恵子が好きだった。

「いいわよ！ コーヒー代なんて、でも・・・」

もつと大きな賭けすれば良かったのに！

千恵子は窓外を見ながら独り言をいった。君は窓に映つた千恵子をみていた。

「あつ！ そう想い出したわ。それでいいのよ。お友達を見送りに来たとき、あてられたんですもの・・・」
「あてられたつて？」

千恵子はそれに応えず一人で合点合点していた。君は、千恵子が突然自分の心から抜け出したと思つた。すると千恵子は君を警戒させまいとして微笑んだ。だがそれが、かえって内心の乱れをまざまざと映し出した。君はそれを見て苦笑していた。

つづく

（挿絵 梶谷忠大・京都大学工学部四回生・美術部員）